立教開宗

慶讃法会（おはなし）二

立教開宗八〇〇年法要

本山佛光寺

慶讃法会基本理念

「大悲に生きる人とあう　願いに生きる人となる」

2023年（令和5年）、本山佛光寺は、慶讃法会として宗祖親鸞聖人御誕生850年、立教開宗800年、聖徳太子1400回忌に併せ、第33代真覚門主伝灯奉告法要をお勤めします。

私たちの生活は、人工知能（AI）をはじめとするテクノロジーの発展により、想像もつかないほど便利になりました。

ところが、相変わらず心の平安は得られず、生きている意味を見失い、生かされている事実を忘れ、傷つけあっていることさえも気づかず、互いに孤立を深めています。

世の中が移り変わり、どのような境遇にあっても、阿弥陀さまの大悲のお心に生きられた親鸞さま。そのおすがたに流れるお心を、自らの願いとして生き抜かれたのが私たちの先人であり、今の私に届いている南無阿弥陀仏の歴史であります。

それは、思いを超えたはかり知れない命との出遇いであり、その命の願いに生きることが、苦悩の中を生きる力となるのです。

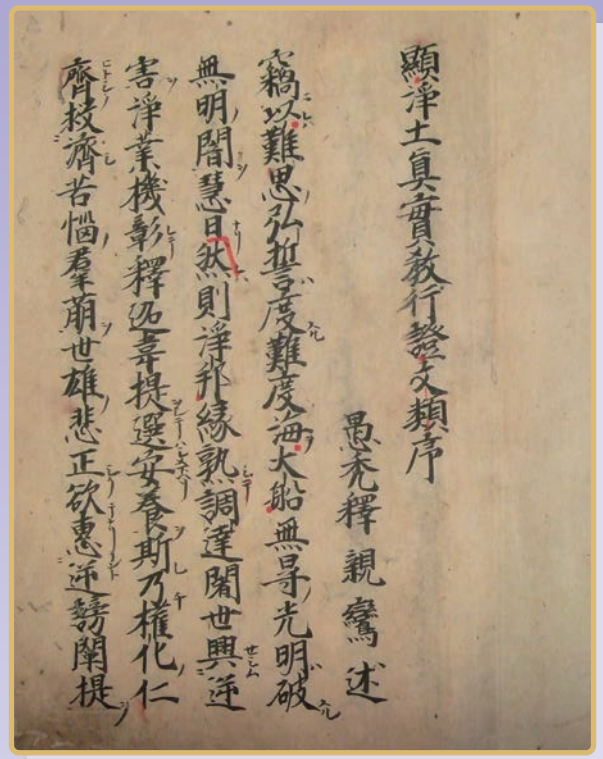
時と処を超えて、人から人へと伝わるともしびを、「大悲に生きる人とあう　願いに生きる人となる」と掲げ、このたびの法要をご縁に歩んでまいりましょう。

本山佛光寺

〒600-8084　京都市下京区新開町 397

Tel.075-341-3321 ／ Fax.075-341-3120

http://www.bukkoji.or.jp/



佛光寺本『教行信証』「総序」

立教開宗八〇〇年法要がお勤めされます。宗祖親鸞聖人は、釈尊の教えが説かれた経典、他力念仏の教えを伝承された高僧方の著作から『教行信証』をご執筆されました。

その成立を親鸞聖人五十二歳の時、すなわち元仁元年一二二四年とみて、立教開宗の年と定めています。

教えをよりどころに

「ゴォー」と、突然の地響きに大きな横揺れ。真夜中の大地震。飛び交う悲鳴に、私は恐怖のあまり外へ飛び出しました。その時、とっさに持ち出したものが、妻と私の実印二本。「これさえあれば」と瞬時の判断でした。

これさえあれば

二か月が過ぎ、延期されていたご法事がようやく勤まりました。読経が終わり、お茶を片手に互いの現況を報告し合っています。

「ねえあなた、何を持ち出した？」

「何って、お位牌よ」

「私は、過去帳。あっ、それと写真よ、主人と姑のよ。置いていくわけにはいかないじゃない」

すると横で聞いていたおばあちゃん、「そうよ、亡くなったらみんな仏さん。大事、大事」と言葉をはさみました。そして、私を見て「そうですよねえ、ご住職」と。さあ、そろそろ実印を持ち出した自慢話でもしようかと思っていた私は、恥ずかしさで声が出せませんでした。

私は、「これさえあれば」と実印を持ち出しました。なぜなら、被災した後の手続きに必要だからです。そして、その判断を誇らしげに思っていました。ところが、法事に参られた方々は、口々にご先祖の位牌や写真を持ち出したと言われたのです。

僧侶である私は、日頃から教えをいただいていたつもりでした。しかし、この地震で愚かな私のすがたが露呈されたのです。

人を通して教えられる

親鸞聖人は、このような私に「南無阿弥陀仏」と教え示されました。私たちはいつでも、私の都合で生きているからです。自分が正しいと、思い上がっている心を、いつでも、どこにいても、だれにでも知らせてくださるはたらきが「南無阿弥陀仏」なのです。

法事にお参りされた方々は、先人が手を合わせ念仏するすがたを見て生きてこられました。だからこそ、写真や位牌、過去帳を持ち出さずにはいられなかったのです。それが、人を通して「南無阿弥陀仏」に出遇うことのあらわれだったのです。

人は、苦しみ悲しみが絶えません。それでも、今日まで生きてこられたのは、その時その時にお念仏をいただいて、先人の歩むすがたに気づかされてきたからです。

親鸞聖人の仰せに「ただ念仏のみぞまことにておわします」という言葉が遺されています。私は、いままで念仏の教えを自身の都合で聞いていたのです。ご法事に参られた方々が出遇われた南無阿弥陀仏を通して、私のまことのないすがたがあきらかになりました。

このように「南無阿弥陀仏」の教えを拠りどころとして生きることを、「立教開宗」という言葉が伝えているのです。